

雨音をかき消すような悲鳴が、裏路地の中から響いてくる。入り組んだその先で、若い女と恰幅の良すぎる男が居た。穏やかに話しているようには見えず、男が女の腕を握って、壁に押し付けていた。

壁に押し付けられた女は、鼻につく生臭い匂いと、体に押し付けられる物理的な圧に、吐き気を感じていた。

「ぶひひ……若い女の匂い……た、たまらん……！」

でつぶりとした腹と段々に重ねられた顎に、小汚さを感じさせるハゲ散らかった頭。豚鼻をヒクヒクと言わせ、下品な笑みを顔に浮かべ舌舐めずりを男はしていた。

さも、長らく待てと言われた末に出されたごちそうを目の前にしているかの様子に、口を塞がれたごちそうは体を震わせていた。

ただただ帰っている所だったのに。突然この路地へ引き込まれて、助けを求めるように悲鳴を上げたものの、誰にも届かなかった。

ニュースで見るとような事件に、まさか当事者として巻き込まれるとは思ひもなかった。どこか他人事のように思っていたが、本当はいつ巻き込まれてもおかしくない

い事を、今実感していた。

恐怖と絶望に、頬に流れる雨と共に涙が溢れる。すり寄ってくる男の体は、生暖かくて気持ちが悪い。もう、なすがままにされるしか無いのだろう。そう、あきらめた時だった。

「おうおう、随分と興奮しているようじゃねえか」  
路地の入口から、声が聞こえてくる。視線を向けると、スーツ姿の男の人が立っていた。

雨の中で、なぜか傘をさしていなくて、髪が濡れてつぶれている。だが、濡れた髪の間隙から見える眼光は鋭く、その視線の先は、女を掴んでいる男へと向けられていた。

「発情期のお前に、オススメの所があるぞ。ちようど、お前ぐらいの豚を連れてこいと言われていてなあ」

降りしきる雨音の中で、男の声は不思議とかき消されること無く、二人の耳に届いてくる。ひたり、と歩みを進めながら、スーツの男は髪を掻き上げた。

助けに来てくれた……事で良いのだろうか。と、女は言葉を聞いて、つい疑問に思ってしまうが、この際どん

な人でも良かった。

あのスーツの男に助けを求めるようにうめき声を漏らしたが、その瞬間首に腕を回される。苦しさと共に、首筋に雨とは違う無機質な冷たさを感じた。

「く、来るんじゃねえよお！ 俺は、ただこの女に誘われたから乗っただけだあ！」

下手なでつちあげに、女は必死に否定をするが、それと同時に一つ違和感を感じていた。

声が完全に焦っていたのだ。この状況だからとか、見られたからにはとか思っている可能性もあるのだが、それにしても何かがおかしい。

まるで、このスーツの男のことを知っているかのような反応だったのだ。

男の行動に、スーツの男は足を止める。人質を取られたからこそ、不用意な動きが出来ないのだろう。非常に面倒くさそうな表情を浮かべると、ため息を吐き出す。

「お前の種族からすると、大抵の可愛い女は全員誘っているように見えるんだろ？ まあとりあえず、そのナイフを離して、俺とお話しようじゃないか」

「うるせえ黙れ！ 近づくんじゃあねえぞ！」

スーツの男は、なだめるように声を掛けるが、興奮した様子の男には届いてない様子だった。

後退りをする男に女も引きずられる。微妙に身長差があるせいで、首が締まって、息がし辛くなってくる。

だが、突然耳に雷のような衝撃音が聞こえた。それと同時に男が一瞬震え、女と一緒に地面に倒れ込んだ。

女は下敷きになって小さく、くぐもった悲鳴をあげる。だが、自由に逃れられるチャンスを逃すわけには行かない。必死に男の腕の中から身を振って脱出すると、口に詰められていたタオルを外した。

淀んでいながらも、冷たい空気が肺の中へとはいっていき、緊張に染まった体から熱を奪っていく。倒れた男の背中から、赤い色が染まっている事に気が付くが、女が正直な所思った感想は、「ざまあみる」というものだった。

「おい顔面バカ！ なんて銃をぶっ放しやがった！？ 人質に当たったらどうすんだ！」

スーツの男が、路地の奥に向かってキレ気味に叫ぶ。

それにつられて、女は視線を動かした。

そこには、レインコートに身を包んだもうひとりの男が立っていた。レインコートの下は先程の男とおんなじスーツ姿だったが、明確な特徴が一つあった。それは、顔立ちだ。

すつと整った鼻先に、ほのぐらい路地の中がかがやきを持つている金糸のような金髪。碧眼の瞳は、冷たさと優しさが両立した不思議な目つきをしていた。

それはまるで人形のように、この裏路地に降りしきる雨の中で、その人の周りだけは空気が違って見えた。単刀直入に言えば、目を奪われていたのだ。

「大丈夫ですよミナセ。オーク種は存外筋肉の塊なので、貫通する心配は無いです」

「そういう話じゃねえ。銃で解決しようとする癖を止めろって言うてんだよ」

「雷撃で無力化出来ない以上、使えるのは弾丸だけだと思っただけです。ヤニ不足でそこまで頭回ってませんでしたが、こつち来てから吸えてませんもんねー？」

「喧嘩売ってるだろ」

視線を突き合わせて、喧嘩腰で会話をする二人に、女は視線を彷徨わせる。一応お互いを知っている様子だが、仲良しではなさそうだ。

そのせいも、二人はその場で口論を始めていた。何かしらの用語が多くて、女にはさっぱり分からなかった。少し余裕が出てきた女が、二人に声をかけようとした瞬間、めりつという音が聞こえてきた。まるで布の内側から引き裂くような音だ。

その音は、先程撃たれた男の方から聞こえてきていた。女が目を向けると、そこには異様な光景があった。

撃たれた男の背中が、膨らんでいたのだ。膨らみきつた背中から、ベリベリという音と共に、女の胴体と同じぐらいの太さの腕が飛び出してくる。

「ひい……っ!？」

思わず悲鳴を上げ、逃げ出しそうになる。昔見たパニック映画で、同じような場面を見たことがあった。その時の人は、必死に命乞いをして、そのまま化け物に殺されていたっけ。

落ち着いてきた恐怖が、再び奥底から湧き上がり、視

界がぐるぐると回り始める。逃げなくては、そう思っても体がこわばって言うことをきかない。

そうしている間にも、男の体を引き裂いて、化け物が出てくる。体格は女一人ならべても、優に超えるほどで、女の胴より太いその腕には溢れんばかりの筋肉がついていた。

化け物の腹はだらしなく膨らんでいるように見えるが、柔らかさを感じることは出来ない。顔は、豚鼻に大きく反り返った牙が口から生えていた。

これを一言で例えるのなら、巨大なイノシシの化け物がそこに立っていた。

化け物が女をみて、舌なめずりをする。その声色は腹の奥底を響かせ、嫌悪感を湧き上がらせていた。だが、その視線を遮るように何かが立ち塞がった。

それは、先程のスーツの男二人だった。その佇まいは、いつもの事だと言いたげな態度で、恐怖を感じている様子はなかった。

「言ったでしょ？ オーク種は筋肉の塊だって」

「腹は脂肪の塊っぽいけどな……くそつたれ、面倒だ」

ミナセと呼ばれた男は女へと視線を向ける。視線の先を路地の奥へと向けると、動かない体へと発破をかけるように女へ言葉を放つ。

「さっさと走れ！」

女はその言葉に弾かれるようにその場から駆け出した。自分がいくら動かそうと思っても動けなかった体は、ただひたすらに言われた言葉の通りに動いていた。

後ろを一瞬向くと、気怠そうに肩を揉むミナセと、フードを捲りあげる男の姿が見えた。

「さてどうするよ、目の前には男のガワを脱いだ豚が一匹いるわけだが」

首を鳴らしながら、顔面バカへと尋ねる。目の前に居る豚……もといオークは明らかに不機嫌そうに鼻を鳴らした。そりや目の前で獲物に逃げられたとなれば、腹立たしくもなるだろう。

「どうするも何も、違反を犯しているのはこのオークの

方ですし。取り締まりの時間ですよ」

フードを外し、伸びをする顔面バカは、さも当然のよう  
に俺の言葉に答える。この世界に來た以上こちら側の  
人間に危害を加える事は許されない。それこそ、郷に入  
ればなんとやらという奴だ。

「だよなあ。投降には素直に応じそうにはないから……  
やるしかないか」

俺は、腰のホルスターから棒状の武器を取り出す。底  
についているボタンを、叩くように押すと、機械音と共  
に重なった刃が勢いよく出てくる。大体地面あたりまで  
伸びると、動きを止め、固定されたことを知らせる音が  
鳴る。

腰を落とし、切っ先を地面に触れるように構える。触  
れた水溜りは、雨以外の振動で不自然なまでに揺れ動い  
ていた。

「どのぐらいまでの使用が丁度いいですかね？ 正直  
私達の種族の仇ですし、最大火力で行きたいのですが」

「それはアニメの話だろうが、見過ぎだ顔面バカ。……  
だがまあ、人間相手の弾じゃ効かねえし、お前に任せる」

そう言って、俺は目の前のオークへと駆け出す。顔面  
バカは、肩をすくませると拳銃をしまい、両手を前へと  
構える。

オークの咆哮が、耳と内蔵を震わせるが、足を止める  
ことはない。振りかぶったオークの腕が、俺の顔面を叩  
き潰そうと振り下ろされる。

「こういう時はジャブするべきだろうがっ！」

悪態を付きながら、剣を平らな方を垂直にして壁に突  
き刺す。ケーキに刃を入れるかのように、するりとコン  
クリートの壁へと刺さると、てこをいれたように急ブレ  
ーキがかかる。ブレーキが掛かった体の真ん前を、オー  
クの腕が通り過ぎ、地面へクレーターを作り上げた。

風圧と破片が体を押しつけようとするが、足をしっか  
りと踏みしめて耐える。そして、剣を壁から抜けば、振  
り下ろされたままの腕を横薙ぎに振るう。

目立った抵抗もなくするりと振られたその剣筋は、一  
瞬切れないかのようなだった。だが、少し遅れて斜め  
に切り落とされた腕は、地面を響かせると同時にオーク  
の叫び声が路地へとこだまする。

高周波ブレード。刃を超高速で振動させることによって、切れ味を格段に上げた武器だ。その切れ味は、古の大木をスポンジのように両断し、鋼を紙のように切り裂く。

いくら頑強な体を持っていても、筋肉や骨が発達しているように、それをまるで苦もせずにも両断することが出来るのが、この武器だった。

血油一つつかない刃を一度振ると、体を横に傾ける瞬間、後方から巨大なつららが、風を切つてオークの切断された断面を狙つて突き刺さる。

傷口に塩を塗るかのような狙いに、思わず寒さとは違った震えが背筋に走る。だが、それよりもあのバカに対して文句が一つあった。

後ろを振り向き、構えを続けるあいつに対して、全力で叫ぶ。

「顔面バカあ！ お前わざと俺を狙つただろうが！」

「射線上に入ってるほうが悪いんですよ。どうせかわせたんですからイイじゃないですか」

すまし顔で、さも当然のように言い放つと、さつさと

攻撃しろと言うように顎をしゃくる。絶対、後で一発ストリートを決める。そう決めながら、目の前のオークへと向き直した。

傷口を狙つたのは、単に塩を塗り込みただけではないことはよく知っていた。オーク種は再生能力に優れていて、四肢がちぎれたとしても、ちぎれた部分をくつつけることで瞬時にくつついて動かすことが出来る。

そのため、もし戦いとなった場合には、一撃で急所を貫くか、断面を再生できないように妨害する必要がある。オークの腕には氷柱が突き刺さっていたが、そこからじわじわと雨を吸収して、傷口を覆うように凍りつく。

オークは片腕を抑えながら悲鳴を上げていると、落ちていた片腕を放置したまま、俺達に背中を向け逃げ出した。方向は街の方で、このまま見逃せばいろいろな被害が出ることは明白だった。それを分かっているが故に、俺の行動は決まっている。

身を低く、まるでクラウチングスタートのような体制を取ると、地面を蹴った。加速する体を制御しながら、徐々に近づいていくオークの股下へと向かつて勢いを

そのままに滑り込む。そして、股下へと入り込んだ瞬間、体を大きくひねって、オークの両膝を切り裂いた。

上半身の勢いをそのままに、膝から下がその場に置いていかれて、オークは顔面から滑り込むように地面へと倒れ込む。それに巻き込まれかけるが、何とか頭を掠るぐらいで通り過ぎると、室外機へと体をぶつけた。

「……クソ痛え」

幸いにも、雨の日で地面との摩擦が少なかったお陰で、スーツには大きなキズなどはなかったが、その代わりに主に背中から発する激痛に思わず言葉がもれる。

骨は折れてなさそうだったが、まるで折れた以上の痛みに顔をしかめる。武器は少し離れた位置に転がっており、立ち上がらないと拾いに行くことが出来ない。

まあ、足と片腕を落としたことだし、何も出来ないだろう。そう思った瞬間、地面を叩きつける音が聞こえた。

オークが残った片腕を地面に付け、室外機に背を預けている俺の元へと這いずってきたのだ。その目は、怒りに支配されていて、目の前の“ヤツ”だけは殺すという殺意に満ち溢れていた。

殺される、そう理解しても体が発する痛みで思うように動かすことが出来ない。だが、逃げる必要は無い。

視線を上へと向ける。先ほどまで降っていた雨は、いつの間にかやんでいた。いや、雨音がしているためやんでいるわけではなかった。

雨粒一つ一つが宙に静止し、結合し、数多くのつららを形成していく。一本一本はさつき見た氷柱よりも小さいが、その数は圧巻なものだった。そして、雨音のようにオークの体へと降り注いだ。発生した冷気で周囲に煙が大量に発生して視界が塞がれる。

暫くして、視界が晴れたその時、目の前に見えたのは、オークの形をした氷像だった。その背中には、いつの間にかこの氷像を作り上げたあのバカの姿もあった。

「……おい、イマージ。俺を囮に使っただろ」

「はて、何のことかわかりませんね」

とぼけたように首を傾げるイマージに、ほんの少しだけ腹が立ってくる。濡れて煌めく金髪の間隙から、長い耳がひよっこりと顔を出していた。

携帯を取り出して、オークの回収と場所を指示すると、

俺の近くまで歩み寄ってくる。

相変わらずのすまし顔に腹が立ってはくるが、實際命を救われたのだから俺は文句を言えない。懐に手を突っ込んで、タバコを取り出そうとするも、雨に濡れたせいで全部湿気て吸い物にならない。

いい加減吸いたくなってきたところで、イメージが俺が持っているのと同じ銘柄を差し出して来る。そのタバコは不思議と濡れていなくて、雨粒を弾いていた。

「……防水加工でもしたのか、これ」

「魔法ですよ、ミナセ」

訝しげに眉間にシワを寄せる俺の疑問に、イメージが当然のように答える。俺がぶつかつた室外機に腰掛けると、指先に火を灯す。タバコを取り出し、口に咥えて、その火をありがたく頂戴する。

そして、胸いっぱい紫煙を吸い込むと空へと吐き出す。雨の中で吸うのは少し違和感を感じたが、久々に味わうタバコの美味さによって煙の様に霧散した。

「……やっぱり、この匂いにはなれませんか」

「そうか？ 慣れたらいい匂いになってくるぞ」

顔をしかめるイメージに、俺は口元に笑みを浮かべながら二口目を吸い込む。どうせ、このオークの回収班が来るまで暇なのだから、この煙草の味をしっかりと噛みしめることにしよう。